

『本朝皇胤紹運録』に淳和天皇の皇女として、一番最後に「統朝臣熟子」が記載されている。一見、この一名の皇女だけが、「統」朝臣を賜っているかのように思われるが、実際は三名、「統」朝臣を賜姓された皇女が存在したと考えられている。林陸朗氏は、昭和四十四年（一九六九）に『上代政治社会の研究』において、これら三名の皇女について考証された（注1）。

それによると、『本朝皇胤紹運録』『皇代記』（群書類従本）に「熟子」とされ、『一代要記』に「就子」とされるなどの異同があるが、これらはみな、次にあげる『三代実録』貞観五年正月二十五日条にかかれた「統朝臣忠子」のことであるとする。（以下、『三代実録』の表記はすべて佐伯有義編『増補六国史』昭和十五年刊・朝日新聞社のものを引用する。）

貞観五年（八六三）正月二十五日条

散事従四位上統朝臣忠子卒、忠子者淳和太上天皇之女也、天長九年賜姓統朝臣、貞観四年正月授従四位上

また『本朝皇胤紹運録』『帝王編年記』『皇代記』（群書類従本）等には仁明天皇皇女として「統朝臣忠子」をあげるが、これについて、林氏は次のように述べている。

この混乱を整理するのは簡単ではないが、『紹運録』に統忠子を仁明皇女としながら天長九年賜姓とするのは合理的でなく、また他方『三代実録』の史料の信憑性を他の諸書より認める史学の常識論を併せ考えると、統朝臣忠子は仁明皇女ではなくて淳和皇女とすべきであろうと思う。

『本朝皇胤紹運録』仁明天皇皇女忠子の注にも、「按、忠子、要記、編年記、皇代記、并載之、然淳和帝之皇女、有統朝臣忠子、疑是一人」と記されている。これらを考慮すると、淳和皇女「熟子」「就子」等は同一人物で『三代実録』のいう「忠子」のことであり、さらに、仁明皇女忠子は淳和皇女忠子の誤りと考えられる。

次に、以下の『三代実録』の記述によって、「統」の姓を賜った淳和皇女としてこの「忠子」と更に「敦子」「尚子」という二名の存在が確認される。

貞観二年（八六〇）十一月二十六日条

廿六日壬寅、無位源朝臣端姫、□統朝臣敦子、並授従四位上、

貞観四年（八六二）正月八日条

授无位源朝臣吾姫、□統朝臣忠子、並従四位上

貞観五年（八六三）正月八日条

無位源朝臣年姫、統朝臣尚子等、並従四位上、

これらの記事について、林氏は、統朝臣の姓をもつ女性が、源姓を持つ、異なる三人の嵯峨皇女とともに叙位されている

こと、いずれも無位から従四位上に直叙されていること、貞観五年（八六三）正月二十五日条に忠子が淳和天皇皇女であり、貞観四年（八六二）に従四位上を授けられたと明記されていることから、この三人がすべて淳和天皇の皇女であり、記載の年次の順に姉妹であったのであろうと推察された。

さらに淳和天皇が天長九年（八三二）二月十五日に発した皇子賜姓の勅に、「並賜朝臣之姓」とあり、特に「源」と限定していないために、このときに敦子・尚子・忠子に「統」姓を与えて、臣籍に下したとされる（注2）。

そして、この「統」という意味は、『後漢書』においては「ちすじ」「血統」であり、『春秋公羊伝』『礼記』においては「はじめ」「本始」「もと」の義であるために、「源」とほぼ同義であると考えると嵯峨天皇が創始した「源」姓が歴代相襲うところの慣習とはなっていないかった証左であると述べられた。

一方、太田亮氏は林氏とは異なる見解を示しておられる。『姓氏家系大辞典』において、「統」（むね）の項をみると、「統朝臣 淳和帝後裔也。三統（ミムネ）條を見よ」とし、そこに「三統宿禰」と「三統朝臣」「無戸の三統氏」の三流について記している。このうち、「三統朝臣」については「淳和天皇の後裔にして」とあって、忠子が貞観五年（八六三）

に卒したこと、天長九年（八三二）に三統朝臣の姓を賜ったとする。つまり、天長九年（八三二）に賜姓されたという点は、林氏と一致するが、その姓については「統」ではなく、「三統」とされるのである。太田氏が「統」を「三統」とする理由は、おそらくは、先の『三代実録』の貞観年間の三つの記事の「統」の上に、いずれも脱字・空闕などの不明な点があるためであると思われる。『増補六国史』においてそれぞれ、次のような頭注が記されている。貞観二年十一月の記事に対しては、

□は詳ならず敦子は紹運録に統朝臣熟子（從四位上）とあると同じかるべし

とし、貞観四年正月の記事に対しては、

□は原本に三とあれど秘本閣本尾本等空闕とす、三統は宿禰姓のみにて朝臣は見えず或は長統朝臣の長の闕けたるかと思へど之も證なければ秘本閣本尾本等に據て闕字とす忠子は五年正月戊子紀に淳和太上天皇之女也天長九年賜姓統朝臣とあり紹運録には同天皇の御女に統朝臣熟子從四上天長二・三七賜姓と見ゆ忠子の御姉なるべし何れも統とのみあ

れども古くより上の一字失せしかと思はる尚よく考ふべし

とし、貞観五年正月の記事に対しては

狩谷校本に統上恐有脱字乎といひ黒川校本に伊の字を補ひたれど所據を知らず伊統氏は六年八月壬戌右京人内教坊頭從七位下秦忌寸善子賜姓伊統朝臣と見え此同族かと思へど年姫と共に無位より直に四位を賜ふに據れば別なるべし、淳仁天皇皇女に從四位上統朝臣熟子見ゆ其御姉妹なるべきか尚よく考ふべし

とする。『増補六国史』の貞観五年（八六三）正月二十五日の忠子の卒去の記事においては「統」についての注はなく、上に欠字等の指摘もない。つまり、敦子・忠子・尚子に関する六国史中の記事、全四箇所のうち、三箇所に「統」字の上になんらかの字の存在が窺われるということである。そこで、次に「三統」「伊統」「長統」について、検討を試みた。まず、最後の「長統」からみると、『増補六国史』の校訂・標注をおこなった佐伯有義氏は、頭注のうち、「長」については、前述のように、「證なければ秘本閣本尾本等に據て闕字

とす」とされる。「長統」という姓は『続日本後紀』承和十四年（八四七）三月一日条に、

肥後國飽田郡人從三位大藏卿平朝臣高棟家令正七位上建部公弟益男女等五人、賜姓長統朝臣、貫附左京三條。

とあるのが六国史に初出のものである。この後、長統朝臣を名乗る者として文德后藤原明子に仕えた長統朝臣三助の名が

貞観元年（八五九）十一月十九日条（中宮少進）、  
貞観八年（八六六）正月二十三日条（皇太后大進）

にみられ、また貞観十五年（八七三）には大和國城下郡出身の長統朝臣河宗という者が本居を左京四條四坊に改められたことが記される。河宗については、元慶六年（八八二）正月七日条にも「散位外從五位下長統朝臣河宗」とその名が見える。

次に「伊統」姓については、斉衡二年（八五五）に「從五位下伊統宿禰福代為園池正」という記事が六国史における初出である。福代はこの後、

天安元年（八五七） 造酒正  
貞観二年（八六〇） 加賀介

となっている。佐伯氏が指摘される朝臣姓を賜った善子等は、貞観六年（八六四）に「伊統」朝臣姓を賜ったあと、貞観八年（八六六）正月八日（從五位下）、同年三月二十三日にもその名をとどめている。三月のものは、右大臣藤原良相邸に清和天皇が行幸し、観桜の宴が催されたときで、叙位に善子の名があげられている。「伊統」は太田氏の『姓氏家系大辞典』によれば、「惟宗」と通じ用いられるとあるので、念のために「惟宗」姓をみると、「秦氏の族にして、元慶七年（八八三）十二月紀に」として、秦宿禰永原等男女十九人に惟宗朝臣を賜ったことが記される。善子等よりさらに後の賜姓である。

さて、この欠字が太田氏等（注3）の考えるように「三」であるとするならば、その元の出自は日置氏である。応神天皇の皇子大守王の後であり、鴨氏とともに主殿寮の伴部として、「湯沐」「燈燭」「墨燎」などに従事していたと考えられている。承和十一年（八四四）十月に左京人玄蕃助從六位上日置宿禰眞浄等の人々が「三統宿禰」の姓を賜ったことから「三統」の姓が史書にあらわれる。この三統宿禰眞浄は、

この後、

承和十四年（八四七） 從五位下、  
嘉祥 二年（八四九） 備後介  
嘉祥 三年（八五〇） 從五位下（文徳天皇即位）  
四月、中宮大進  
仁寿 三年（八五三） 周防守  
四月、中宮大進  
斉衡 元年（八五四） 美濃介、中宮大進如故  
五月、次侍從  
天安 二年（八五八） 皇太后亮（清和天皇即位）  
貞観 元年（八五九） 從五位上  
貞観 三年（八六一） 伊勢介、皇太后介如故

以上のように、文徳后藤原明子に仕える官人であったことがわかる。

この他、『三代実録』序によれば、編纂に関わったものとして「三統宿禰理平」の名があげられる。理平は寛平八年（八九六）少外記、同年（八九八）大外記、大蔵善行とともに『三代実録』の編集に加わる。しかしながら延喜元年（九〇一）正月從五位下、同年二月に越前介となつたために、同年

八月に『三代実録』が完成奏上したときには名を連ねることがなかった。帰京した後は、大内記となり、延喜格の編集に関わり、延喜七年（九〇七）閏十二月十七日、醍醐天皇の日本紀寛宴において、和歌序を作っている。延長四年（九二六）に七十四歳で卒するまでに文章博士となり、式部大輔を任じられ、從四位下まで進んでいる。

以上、「統」の上の欠字の候補として、「長統」「伊統（惟宗）」「三統」の三種の姓について検討したのであるが、伊統宿禰福代以外は、いずれも淳和皇女敦子等が賜姓された天長九年（八三二）より、あとに賜姓された記事があり、いささか不審である。というのも、生母の姓を皇孫が賜うという事例は見られるものの（注4）、その反対の例はみられないためである。この点、伊統宿禰福代は、もともと「伊統」姓であつたと思われ、敦子たちの生母の一人がこの一族の出身であるので、その姓を受けたという考え方が可能となる。しかし、福代の名が史書に見え始めるのは文徳朝であり、仁明天皇もすでに崩御したあとである。淳和皇女との確たる繋がり示すものは何もない。

そこで、賜姓皇女の姓を後代、何らかの関係がある臣下に賜つた初例として認めるならば、可能性としては太田氏のあげる「三統」がもつとも有望ではないだろうか。その根拠は、

『三代実録』編纂に関わるものとして理平がいるためと、先の貞観四年正月の記事に対する頭注において、「□は原本に三とあれど」と記されている為である。

しかしながらこれもあくまでも推測の域を出ることはない。更にいえば、林氏の考えられるように嵯峨天皇が初めて「源」という一字姓を付けたことに、淳和天皇が準じたと考えられるならば、「統」のみということも十分に考えられるのである。

結論として現時点で確実にいえることは、淳和天皇には忠子のほかに、敦子と尚子という賜姓された皇女がいたという点のみである。同母であつたかどうか、不明である。共に叙位されている源氏の端姫（生母・布勢氏か）、吾姫（生母・内蔵氏）、年姫（生母・不明）がおそらく皆、異母姉妹であることからいっても、敦子・忠子・尚子も異なつていた可能性は多分にある。なお、この「統」（あるいは「□統」）姓は淳和皇女の敦子・忠子・尚子の三名のみで、「源」姓のように、後に引き継がれることはなかつた。

年齢的には林氏が指摘されたように、叙位の順に敦子・忠子・尚子であつたと考えるのが尤も妥当であろう。二番目の忠子のみ卒去の記事が残されているのは、『三代実録』編纂の終了の時点で亡くなつたのが忠子のみで、敦子と尚子は生

存していたからと考えるのがもつとも無難である。忠子は尚子が叙位された年に亡くなつたために記録に残された。仮に、天長九年（八三二）の勅令によつて三人全員が賜姓されたとして、三女尚子が尤も若くて一歳とすると、『三代実録』の記事が終わる仁和三年（八八七）には、敦子は五十八歳以上、尚子は五十六歳以上で、生存の可能性は十分にある。

淳和皇統は、承和の変で恒貞親王が廃立され、途絶えたが、しかし、そのまま歴史の中に埋もれてしまつたわけではない。後藤祥子氏は『扶桑略記』卷廿（陽成）の巻末、元慶八年（八八四）二月四日の記事により、陽成天皇が廃されたときに、次の帝として藤原基経が最初に白羽の矢を立てたのは、すでに出家して恒寂と名乗つていた淳和皇子、恒貞親王であつたことを指摘されている（注5）。しかしながら恒貞親王は食を断つて、それを拒み、その同じ年の九月二十日に六十歳で入寂する。ここに至つて淳和皇統は永遠に沈黙したのであつた。つまり、淳和上皇が崩御し、嵯峨上皇が崩御して、承和の変が起こり、光孝天皇が即位するまでの四十数年にわたり、淳和皇統は、心ある人々の意識に記憶されつづけ、そのようになかで敦子・忠子・尚子は生きたのであつた。

（一文字昭子）

注1 林陸朗氏『上代政治社会の研究』

II章 平安初期の政治社会「賜姓源氏の成立事情」  
(吉川弘文館)

注2 『三代実録』天長九年(八三二)二月十五日条

朕之男女不過数人、猶不欲皆疏茅爵之封、共致湯沐之費、今思既号親王依旧不悛、同母後産号之亦同、自外並賜朝臣之姓、或可親王者、特将定焉、斯所以省弊之遠図、為国之長策者矣、

注3 『増補六国史』の底本は松下校訂寛文十三年の版本である。貞観四年正月の記事に対する頭注において、佐伯有義氏は、「□は原本に三とあれど」と断っていることから、松下見林も「三統」と判断したものと考えられる。

注4 『続日本紀』天平八年十一月十一日の条文によると、從三位葛城王、從四位上佐爲王等が聖武天皇に上表して「…葛城親母、贈從一位懸犬養橘宿禰、」と母である懸犬養橘宿禰三千代がその忠誠によつて元明天皇より、橘宿禰姓を賜ったことを挙げ、「是以臣葛城等、願賜橘宿禰之姓、」と述べている。

また長屋王の子、山背王が藤原朝臣弟貞の氏姓名を

賜ったことについて、『公卿補任』天平四年条に

「左大臣長屋王子。母不比等女。賜母姓為藤原朝臣」とある。

注5 「光源氏の原像―皇統譜のゆがみと漢文世界―」

(『王朝文学史稿』第二十一号・平成八年三月)

●史料 文頭の数字は西暦、( )内は筆者による

【統朝臣敦子】母、不明／最終位、從四位上

860 (貞観二年十一月二十六日) 廿六日壬寅、無位源朝臣端姫、□統朝臣敦子、並授從四位上、

『三代実録』

【統朝臣忠子】母、不明／最終位、從四位上

863 (貞観四年正月八日) 授无位源朝臣吾姫、□統朝臣忠子、並從四位上

『三代実録』

863 (貞観五年正月二十五日) 散事從四位上統朝臣忠子卒、忠子者淳和太上天皇之女也、天長九年賜姓統朝臣、貞観

四年正月授從四位上

『三代実録』

並從四位上、

『三代実録』

統朝臣熟子(從四上。天長二三七賜姓)

【注】按、熟子要記作就子、三代実録作忠子、皇胤系図皇代記同本書、三代実録、貞観五年正月廿五日、散事從四位上統朝臣忠子卒、淳和太上天皇之皇女也、天長九年賜統朝臣姓

『本朝皇胤紹運祿』

賜姓 統朝臣忠子

『皇代記』(新校群書類從)

統朝臣忠子(母不知／天長九年賜統朝臣姓)

※仁明天皇の項にあり。

『帝王編年記』

【統朝臣尚子】母、不明／最終位、從四位上

863 (貞観五年正月八日) 無位源朝臣年姫、統朝臣尚子等、